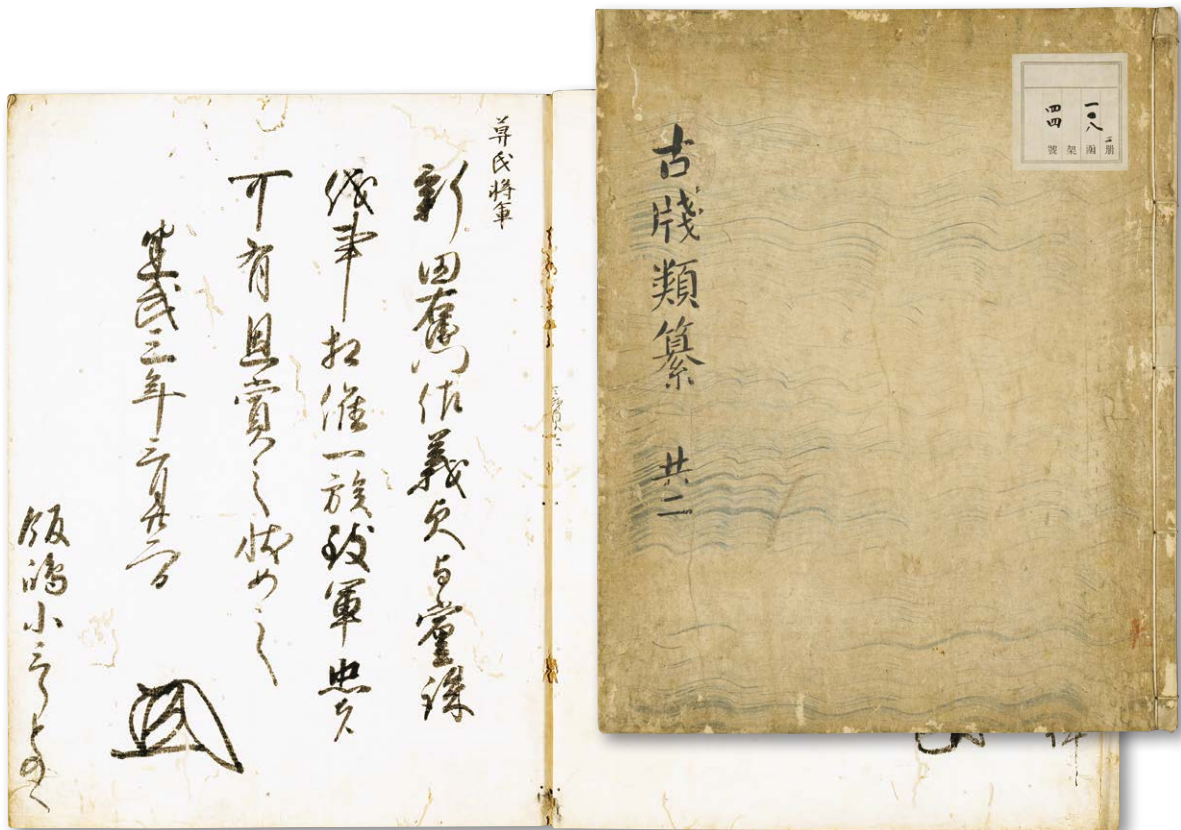


蓬 左

HÔSA



古版類纂

青松葉事件

名古屋大学名誉教授 羽賀祥二

一

青松葉事件は、王政復古・鳥羽伏見の戦いの直後、明治元年（一八六八）一月二十日から二十五日にかけて尾張藩内で起きた政治的事件である。新政府軍が勝利し、その余勢を駆って東山道・東海道・北陸道へ先鋒軍を派遣しつつある情勢において、江戸へ進軍する際の戦略的な要衝の地が名古屋であり、また美濃・尾張・信濃に所領を有する尾張藩の政治的動向は、新政府軍・旧幕府軍双方にとって、きわめて重要な関心事であった。

青松葉事件と呼ばれてきたのは、旧幕府の支援勢力と見られた指導者を藩政から排除するために、元藩主で、新政府の議定となった徳川慶勝や付家老成瀬正肥が「朝命」を振りかざし、斬首、蟄居、謹慎など厳しく処断した事件であった。同時代史料にも断片的な形ではあるが、事件にふれたものもある。事件からおおよそ半世紀を経た大正五年（一九一六）に刊行された『名古屋市史 政治編第二』が、こうした史料を利用して、事件を考証し

た。これは戦前の研究ではもつとも優れた成果であり、現在もこれに基づいた理解が影響力を保っている。

一月二十日、京都から名古屋城に帰った慶勝らは、渡辺新左衛門・榊原勘解由・石川内蔵允に対して、「年来姦曲の処置」があったという罪名をあげて、突如斬首の厳命を下した。こうした動向について『名古屋市史』は、渡辺ら「佐幕派」には幼主義宜を擁して幕府を支援する「隠謀」があり、彼ら佐幕派勢力を一掃して、藩内の動揺を鎮め、王政復古という事業に協力する体制ができたとしつつも、義宜擁立計画や「年来姦曲の処置」を裏付ける史料はなく、また事件の原因は明らかではないと結論付けた。

戦後の事件研究では、水谷盛光氏による史料の丹念な収集を基にした事件全体像の解明の試みが特筆される^①。また、最近では藤田英昭氏（徳川林政史研究所）による尾張藩維新史の仕事が、旧来の研究を一新したものととして注目される^②。藤田氏は、①前藩主徳川茂徳（玄同）の動向、②慶応三年の藩内状況（慶勝や成瀬らは一枚岩ではないこと）、③鷺津九蔵ら明倫堂グループの台頭、④大政奉還前後の藩内対立（若井鋏吉ら「奸人」の追放）などを丁寧に明らかにされた。この事件

に関しては、慶勝は事件に関与していなかったこと、茂徳に近い藩士が多数処罰されたこと、斬首の打手に明倫堂の学生がいたこと、など新しい見解を提示した。

二

青松葉事件は維新後の尾張藩の事蹟調査をきっかけに、その内容が明らかにされるようになった。その始まりは、政府に提出された『華族家記 徳川義宜』にあり、この記録の附録として「斬姦筆記」がまとめられた。それには『名古屋市史』と大きな違いがいくつかあり、とくに渡辺らの「隠謀」が具体的に記述され、彼らは大坂城の旧幕府勢力と気脈を通じ、藩内で「朋党」を結び「金穀兵器」を蓄え、義宜を擁して慶喜を応援する計画があったと述べている。また一月十九日に慶勝は名古屋城に入る予定であったが、一日延期されたのは、渡辺らが「兵権」を有しており慎重な行動が必要だったためとする。さらに渡辺ら三人は自刃を命じられたとし、斬首説を採っていないことも重要な点である。

この『家記』が誰の手で書かれたのかはわからない。しかし、旧尾張藩の歴史史料の蒐集、維新史の編纂に中心的な役割を果たした水野彦三郎に注目してみる必要がある。

水野には『三世紀事略』（名古屋叢書第五卷）という編書があり、これには「姦徒誅鋤」という附録が付いている。この内容は『華族家記 徳川義宣』とはかなり異なっている。渡辺らには事件以前から「不正ノ志」があったこと、義宣を擁して江戸に走り徳川宗家を救援する計画を有していたこと、などを指摘している。水野は安政六年（一八五九）九月、儒者に召し抱えられて以降、儒臣として茂徳・慶勝に仕えた。維新後には、藩史編さんを担い、そのために『幕末維新書翰集』、『維新前後雑記録』（いずれも蓬左文庫所蔵）をまとめている（3）。

水野は事件当日の一月二十日、江戸から名古屋に帰っていた。当日は城門が閉ざされ、入城できなかったという。『維新前後雑記録』には、事件に関する草稿類がいくつかあり、推敲を重ねた様子がわかる。また蓬左文庫には、『誅鋤 奸党誅鋤ノ件』、『青松事件関係書』と題した編さん史料もある。水野は尾張藩維新史の編さんの過程で、関係者への聞き取りを行なっているが、その一人に渡辺銭次郎（正蔭、舩彦）という人物がいる。銭次郎は事件に中心にいた人物で、しかも事件当日に榊原勘解由を斬首した打手でもあった。

三

銭次郎の略歴は『名古屋市史』人物編（一九四三年刊）に記載がある。文久二年（一八六二）七月、安政の大獄に連座した慶勝や成瀬が幕府から罪を解かれ、藩内でも田宮如雲ら多くの藩士が復権した（4）。この復権運動に尽力したグループの一人が銭次郎であった。彼の履歴には不明な点も多いが、元治元年（一八六四）十月には慶勝が総督を務めた長州征討に銃隊長として従軍した。慶応三年（一八六七）十月の大政奉還の直後、慶勝は上京するが、その際には「願御供」藩に出願して特に慶勝の供となることを許され、「願御供」の藩士の取締役を勤めた。そして青松葉事件では中心的役割を担うことになった。事件後には、軍監として東征軍に加わり、江戸から会津へと転戦した。帰国後の明治二年（一八六九）十月には、名古屋藩権大参事の要職に就き、主に軍事部門を担当した。

銭次郎に関連する諸資料は、長く日の目を見なかったが、平成三十年（二〇一八）、関連資料が津島市の堀田家から蓬左文庫へ寄贈された。銭次郎の曾孫（正蔭の子・皐月の孫）に当たる堀田春子氏が、長い時間をかけて熱心に整理と解説の作業を継続されてこられたものである（5）。関連する資料は二五〇点

ほどあるが、残念ながら多くの資料が散佚したようである。しかし、戊辰戦争や維新後の藩政への関わりを示す貴重な資料もあり、他方多くの母宛の書簡からも当時の切迫した政治情勢をかいま見ることができる。

四

資料の中に、事件の核心に迫る自筆の事蹟録「過去現在未来記」という文書がある。これには十六歳で父六一郎より家督を相続してから、愛知県第六中学区取締に就任するまでの事蹟が記されている。銭次郎は明治八年（一八七五）八月に死去するが、その直前に書かれたものと推定される。ここでは慶応三年（一八六七）の慶勝の上京から青松葉事件に至る箇所を引用してみよう。（※丸括弧内は筆者による注）

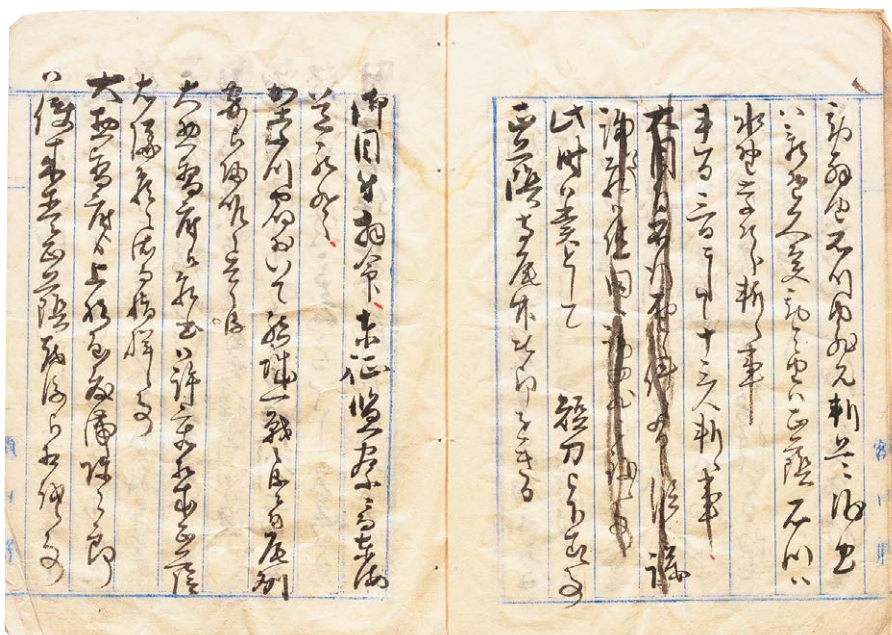
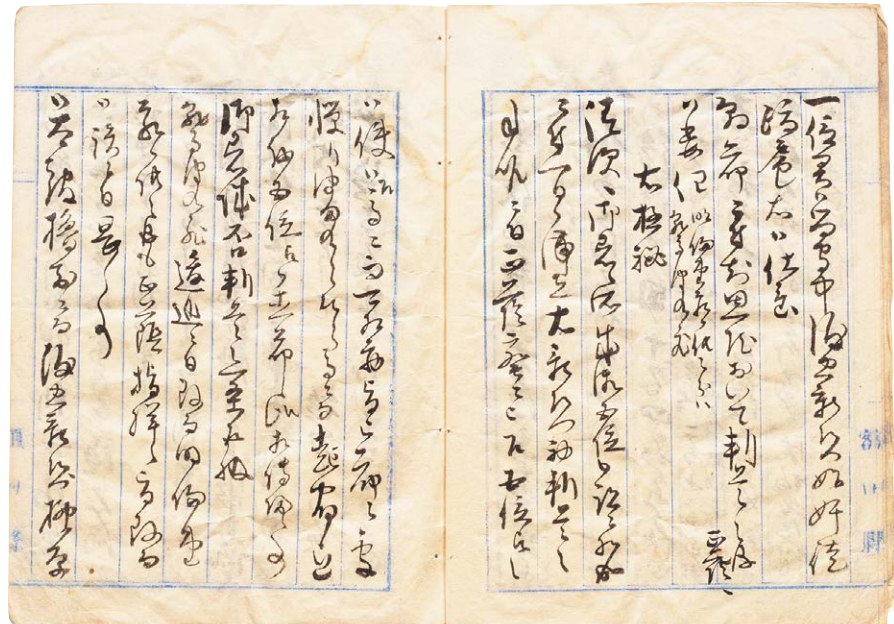
大納言様（徳川慶勝のこと）御供ニ而七
十二人願御供之輩惣轄ニ而上京、伏水一
拳ニ付日御門御堅メ被命、願御供輩締行
届候旨ニ而、御袴地被下置候事（中略）一
位君（徳川慶勝のこと）御留守中、渡辺新
左衛門始奸徒跋扈、右御仕置朝命ニ付、
知恩院において斬首之儀正蔭（渡辺銭次郎
のこと）へ御委任、
明倫堂願御供之分ハ
鷺津九歳

右極秘

清須へ御着候所、成瀬五位(隼人正正肥のこと)御跡二相成二付、一日御滞在、右新左衛門初斬首之手順二付、正蔭密々二被召、五位江之御使、御召馬二而可相勤旨被命候処、憚り津田九郎次郎馬二而起宿迄相越、五位江御直命之趣相伝帰候事御着城否斬首之一条取扱、鷺津九藏逡巡二付、改而明倫堂願御供之儀も、正蔭指揮候旨改而御談二付畏候事

御太鼓櫓前二而、渡辺新左衛門・榊原勘解由・石川内藏允斬首、渡辺ハ新野久太夫、勘解由ハ正蔭、石川ハ水野慶次郎斬候事

「願御供」によつて慶勝に供奉した藩士は、鷺津九藏(明倫堂督学)のグループと、銭次郎が総轄した願御供のグループがあった。慶勝の上京中に渡辺新左衛門ら「奸徒」が跋扈し、一月十五日に「奸徒」の処分と勤王誘引の任を果たすことを命じた御沙汰書を受けた後、京都知恩院で銭次郎と鷺津が「奸徒」の斬首を委任された。そして銭次郎は「奸徒」処罰の手続きを打ち合わせるために成瀬への連絡役を勤めたことを記す。興味深い点は、渡辺ら三人の斬首を前に、鷺津が「逡巡」したため、銭次郎が明倫堂「願御供」から選ばれた打手も指揮するように指示されたというこ



「過去現在未来記」

青松葉事件について記した
箇所
(本文引用の「一位君…」以下
の箇所)

とである。

五

この事蹟録からわかることは、事件における銭次郎の役割である。しかし事件の背景を窺うことはできない。なぜ青松葉事件のような多くの藩士を巻きこんだ事件が起きたのだろうか。直接的な資料がないとすれば、丹念に幕末維新史のプロセスを追ってみるほかないだろう。

幕末尾張藩の政治的動きで注目されるのは、「姦徒」を執拗に排撃する傾向である。文久二年に付家老竹腰兵部少輔（正諛、年寄鈴木丹後守（重到）、側用人武野新右衛門が処罰された。そして慶応二年には、城の両鉄門外の下馬杭に、「尾藩蓋世憤士」による「告姦吏」と題した張紙がなされた。この張紙では、竹腰、年寄加判成瀬能登守、明倫堂督学塚田惣四郎が「巨姦」として糾弾され、沢田庫之進・松井市兵衛らも「隠悪佞奸」にして実二国賊之魁首」として攻撃の対象となった。武野と塚田は青松葉事件で斬首され、松井は隠居の処分を受けた人物である。

さらに藤田氏が指摘したように、慶応三年十月には、水野石見守・松井市兵衛・間宮伴右衛門・若井鋏吉が藩政から排除された。松

井や若井は茂徳・慶勝を長いあいだ補佐してきた側近であった。このように文久期以来の五年余の間、何度も「奸臣」が攻撃され、あるいは藩政から排除されるという動向が見られた。こうした連続的な「奸臣」排除への執拗な動きの延長線上に斬首を含んだ大がかりな政治的処罰があった。

六

こうした敵対勢力の排除の動きの中には、渡辺・榊原・石川の名はない。なぜ彼ら三人は最初に斬首に処せられなければならなかったのだろうか。『華族家記 徳川義宣』には「渡辺新左衛門始ハ兵権ヲ有スル者ニシテ、率爾手ヲ下ス可ラサル」という記述があった。また他の史料にも同様の記述がある。慶応期には渡辺らはたびたび大番組や寄合組を率いて、京都・大坂に出張していた。銭次郎も銃隊長を勤めるなど軍事部門に関係していた。幕末藩政史における軍事部門の編制や司令官の担い手といった問題の解明も、事件を考察する上で不可欠だろう。これに加えてもう一つの課題がある。塚田惣四郎・若井鋏吉・鷺津九蔵・水野彦三郎はいずれも儒臣として藩主の側近を勤めた。彼らは政治文書の起草、朝廷・幕府・諸藩との周

旋活動などを担当した。儒臣（側近）と政治との関係は大きなテーマであろう。

- (1) 水谷『尾張徳川家明治維新内紛秘史考説』一九七一年、自費出版。
- (2) 藤田英昭「慶応三年における尾張徳川家の政治動向」（徳川林政史研究所『研究紀要』第五十号、二〇一六年）、同「慶応四年前後における尾張徳川家の内情と政治動向」（同『研究紀要』第五十二号、二〇一八年）、同「慶応期の尾張藩」（羽賀祥二・名古屋市蓬左文庫編『名古屋と明治維新』風媒社、二〇一八年）。
- (3) 水野については、木村慎平「『幕末維新書翰集』と水野彦三郎」（『蓬左』九三、二〇一六年）、「『幕末維新書翰集』解題」（『名古屋市蓬左文庫文庫所蔵史料目録（一）』名古屋市蓬左文庫、二〇一八年）を参照。
- (4) 羽賀祥二「文久期の尾張藩」（前掲『名古屋と明治維新』所収）。
- (5) 堀田晴子「渡辺正蔭（銭次郎）の遺稿に想う」（『郷土文化』第四十五巻第二号、一九九〇年）。この論考には現在残っていない銭次郎の母宛書簡など、重要な史料の紹介がある。

鵜飼籠中記と千代倉家日記(中)

◆御畳奉行、鳴海へ行く

正徳元年(一七一二)の夏、六月も終わりを迎えようとする日のことである。この年は元禄十三年四月に御畳奉行となつてから十二年目、また宝永五年八月に文左衛門から定右衛門に改名して四年目にあたり、年齢は三十八歳となつていた。御畳奉行は物見遊山ではなく、暑い盛りに「御用」で東海道の宿場町、鳴海を訪れた。

(六月)廿九日 快晴 卯前鳴海へ御用にて行。笠寺にて酒給。辰七刻鳴海着。御用仕廻。未過横地仁兵衛案内にて、金右衛門山上の茶亭(三畳敷)へ上る。岡崎弥兵もあり。眼下鳴海の宿、海面夕日に耀き、青苗天際に接す。帆船見へ、比屋参差たり。吸物・酒・肴給。甚楽。仁兵衛家老金六(十八)侍酌。(以下続きは後述)現在の暦に換算すると八月十三日あたりで、「残暑厳しき」の言葉がふさわしい、まさにじりじりと太陽が照りつける暑い盛りの日だったようで、日の出は今の時刻で朝五時過ぎである。「卯前」に出発したというから、日の出前のまだ暗いうち、午前四時過ぎには主税町(現在の東区主税町4丁目中央の交差点あたり)の自宅を出発し、おそらく熱田

から東海道に入つて、途中笠寺で小休止(生来の酒好きであった)、辰の終りより少し前というから、現在の午前八時半頃であろうか、鳴海に到着して仕事を済ませた。残念ながら、どんな「御用」であったか、仕事の内容までは記していない。この日に限らず、当人は仕事のことはほとんど日記に書いていない。そして、未(午後二時頃)過ぎ、山上の茶亭に招かれて酒食のもてなしを受けるのである。

ここに登場する人物について整理しておこう。まず横地仁兵衛は、宝永元(元禄十七)年秋七、九月に起きた鳴海出女事件で失職した奥田彦九郎に代わつて、鳴海を担当することになった大代官で、御畳奉行とは旧知の中であつた。岡崎弥兵衛は文左衛門の母方の親戚筋で普段から付き合いが深く、鉄炮頭や江戸在番の折は足軽頭などを務めていた。いわば警備担当である。

そして、これらの役人を迎える側が下郷金右衛門で、下郷家二代当主吉親の知足の弟三郎左衛門である。天和四年(一六八四)三月以降、知足から鳴海宿の中心部である表方の庄屋職を引き継ぎ、従来の三郎左衛門を金右衛門と改名した。なおかつ、先の鳴海出女事件で十日間入牢の身となつた、その当人であつた。御畳奉行はこのことに気づいたであろうか。

それはさておき、鳴海宿東郊の細根山には下郷家の山荘があつた。といつてもわずかに三畳の小さな茶亭である。天和三年十二月、知足の妻かめの

死を悼み、菩提をとむらう草庵を細根山に建て、寂照庵と名付けたと、一般には喧伝されるが、あくまでも伝承であり、真偽のほどは定かではない。

少なくとも千代倉家日記を見る限り、元禄二年(一六八九)の閏正月十一日に細根山を含む鳴海山一帯で藩主光友が鹿狩をおこなつており、その折にこの細根の茶亭で昼食をとつた。この鹿狩に間に合わせるようにと、その年の正月から閏正月にかけて、次のように「亭」すなわち茶亭の造作にとりかかっていることが確認できる。

正月十六日 亭ノ大工新初。

閏正月朔日 ちん柱立。

同 三日 ちん屋ねふく。

同 六日 亭ノ壁下地かく。

同 十一日 なるみ山、御鹿狩有。御目見へ二

いずれも出間敷旨、所左様(大代官、五味所左衛門)より申被参候。せこ(狩の手伝人足)不出。昼食御茶やにて。

この年の三月四日、参勤交代で江戸へ向かう途次、光友は鳴海へ一泊した折にも「両殿様(光友と第二子の摂津守松平義行)七つに御入。(中略)ちんへ御上り。」と山上の茶亭まで足をのばし、翌朝江戸へ向けて出立した。

これらの記事からは、藩主やその係累など、賓客をもてなすための茶亭として建てられたようにうかがえるが、後代まで営々と整備が続けられた(次頁下段「尾張名所図会」挿絵参照)。

さて、わずか三畳の小さな茶室で御畳奉行は同じく城下から出向いた知己の者とともに吸物、酒、肴でもてなしを受けた。酒好きの御畳奉行は「甚楽」、漢詩風に山上からの眺望を即興で詠んだ。曰く、

眼下鳴海ノ宿

海面輝^キニ夕日^ニ

青苗接^スニ天際^ニ

帆船見^ヘ比屋参差^{タリ}

五言で始まったものが、最後は七言となつてしまった。まあ、これは酔いが回つての御愛嬌である。

御畳奉行はこの日の日記には書いていないが、実はこの年の秋には、朝鮮通信使の来訪が予定されていた。一行の鳴海御用は、おそらくその下準備のためだったと思われる。

この事を裏付ける記録は、「千代倉家日記」の中に同一の日付で記されている。記したのは下郷家二代目当主知足の跡を継ぎ、三代目当主となつた、長男の蝶羽（本名季雄）である。一部虫損によつて判読できない箇所があるのは残念だが、おおよその大意は読み取ることができる。

（六月）廿九日 照強ク 名古屋御代官、御国奉行富永三右衛門殿、岡崎弥兵衛殿、井ノ口治太夫殿、小瀬新右衛門殿、兼松七之丞殿、朝鮮人御居□□□二付、宿見二御越。并、御畳奉行朝日定右衛門殿、宅□杯御越。此方懸彼為二付、不残表かへ。三郎左衛門、御代官、岡崎八兵衛殿、亭二而酒盛。（中略）日暮而御

立。富永殿、此方ニ少時御休被為申候。

蝶羽の記したこの日記には、既出の人物だけではなく、御国奉行富永三右衛門をはじめとして、井ノ口治太夫（井野口治太夫・大寄合）、小瀬新右衛門（御用人）、兼松七之丞（御供番）なども鳴海を訪れていた。藩主の参勤交代で見送り・出迎えに藩の要職者が訪れるのは日常のことであつたが、このような下準備で国奉行までがお出ましとは、出女一件のこともあつて、鳴海宿の面々は緊張したのではあるまいか。

朝鮮通信使は着船する大坂と江戸の間を徒歩で往復したが、今回、尾張領内では名古屋城下で一泊し（本陣は大須の性高院^{しょうこういん}）、その後、起宿^{おきしゆく}と鳴海宿で小休止することになつていた。このため鳴海宿本陣や、惣年寄で脇本陣格の千代倉家（下郷家）なども下見の対象となつたのである。

◆行きはよいよい、帰りは？

陽も傾き、すっかり酔いが回つて日も暮れようとする頃、山上の宴もお開きとなつた。「鸚鵡籠中記」の後半部分である。

申半過飯る。弥兵が馬に予乗。熱田にて下りぎまに酔ゆへ、けつまぎ倒る。左の足の小指の根を大に裂破り、流血狼籍たり。加之、臀を鞍にてすり破る。戌半飯宅。

申半過は夕方六時過ぎ頃、残暑厳しき折でまだ陽も高く、昼間の暑さが残っている時分である。

すっかり酔いの回つていた御畳奉行は、騎馬で訪れていた岡崎弥兵衛の馬に乘せてもらい、熱田まで馬の瀬にゆられて帰宅の途についた。が、よけいに酔いが回つたようである。

熱田で馬を降りる際、よろけてけつまづいてしまった。その際に、左足の小指のつけ根が裂けてしまい、血だらけである。当然草鞋は使い物にならなくなったであろう。

落馬する時に鞍でひつかったのか、臀部もすり破る始末。満身創痍でいたいどこをどうやって自宅まで帰ったのか、着いたのは戌半というから夜八時頃。なんとも情けない姿での帰宅であつた。



▲知足の50回忌を翌年に控えた宝暦2年(1752)以降、細根山の整備が進められた。

古棧類纂

『古棧類纂』は、南北朝時代から織豊期までの、武家がやり取りした文書の写しを集めたものである。二冊からなり、第一冊には三七点、第二冊には二五五点の計六二点の文書の写しが入録されている。寛政期(一七八九～一八〇一)に成立した尾張藩の蔵書目録である『御文庫御書籍目録』(寛政目録)では「源敬様御書物」つまり尾張藩初代藩主・徳川義直の書物の一覧でその名が確認できる。そこには、「慶安(一六四八～一六五二)の御書籍目録に「古牌写 一冊」として名が見え、(中略)天明二年(一七八二)に二冊に取り繕い、古棧類纂と名付けられた」(筆者訳)と注記があり、本来は一冊にまとめられた状態であったとされる。

さて、この『古棧類纂』には足利將軍家をはじめ、大内氏や武田信玄・豊臣秀吉などの文書の写しが採録されており、主に中国地方に関係のある人物・内容の文書が揃えられている。基本的に編年式に並べられ、原本と比べると、筆跡から花押影、字配りなどもかなり意識して写されている事が分かる。

これらの原本は、そのほとんどが長府

毛利家に伝わるものであり、現在は山口県指定文化財『手鑑』(萬代帖)とも、山口市歴史民俗資料館蔵)や、同『手鑑』筆陳』(下関市立歴史博物館蔵)等の中に確認することができる。義直と長府藩初代藩主の毛利秀元は、茶会等を通して親交があったことが分かっており、『古棧類纂』がその伝手で写されたことも可能性として考えられる。

この他にも、当文庫蔵で長府毛利家文書を写したものに、『古今書札判形之写』(四巻四冊)等がある。『古今書札判形之写』は長府毛利家以外に伝来するものもかなり収録されているが、古筆切などの写しは一切なく、『古棧類纂』同様、武家文書集であり、義直の蔵書であった。

また、『古証文』(国立公文書館蔵)等にも『古棧類纂』や『古今書札判形之写』に採録されているものが多く見られる。原本とともに、これらの写しの関係性や共通点・相違点を吟味し、いかなる目的・背景でこうした武家文書集が近世に作成されたかを考察していく必要がある。

(蓬左文庫 加藤千沙)

【参考文献】

『蓬左』第三六号(名古屋市蓬左文庫、一九八九年)
『手鑑』萬代帖』(山口市教育委員会、二〇〇一年)

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫 〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地 TEL(052)935-2173 FAX(052)935-2174
ホームページ <http://housa.city.nagoya.jp/> / 蔵書検索もできます。

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス(メーグル)】名古屋駅前11番のりば名古屋駅発着で平日30分～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行、
「徳川園・徳川美術館・蓬左文庫」下車徒歩1分

【市バス】名古屋駅前10番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター3F 4番のりば基幹バス「三軒家」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【JR】JR中央線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

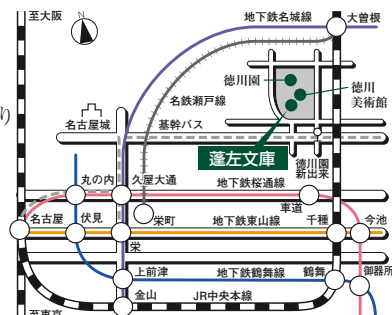
【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車③番出口より徒歩15分 桜通線「徳重」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル(オアシス21)3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場(有料 30分120円)をご利用下さい。



ご利用案内

■休館日/月曜日(祝日・振替休日のときは直後の平日) ※催事により変更することがあります。

令和3年12月13日(月)～令和4年1月3日(月)は特別整理・年末年始により休館します。

■展示室/有料 一般:1400円 高大生:700円 小中生:500円(蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧)

令和4年1月4日(火)～1月30日(日)は、一般の観覧料は1200円です。

【開室時間】午前10時～午後5時(入室は午後4時30分まで)

■閲覧室/無料 館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時 午後1時～午後5時 【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。